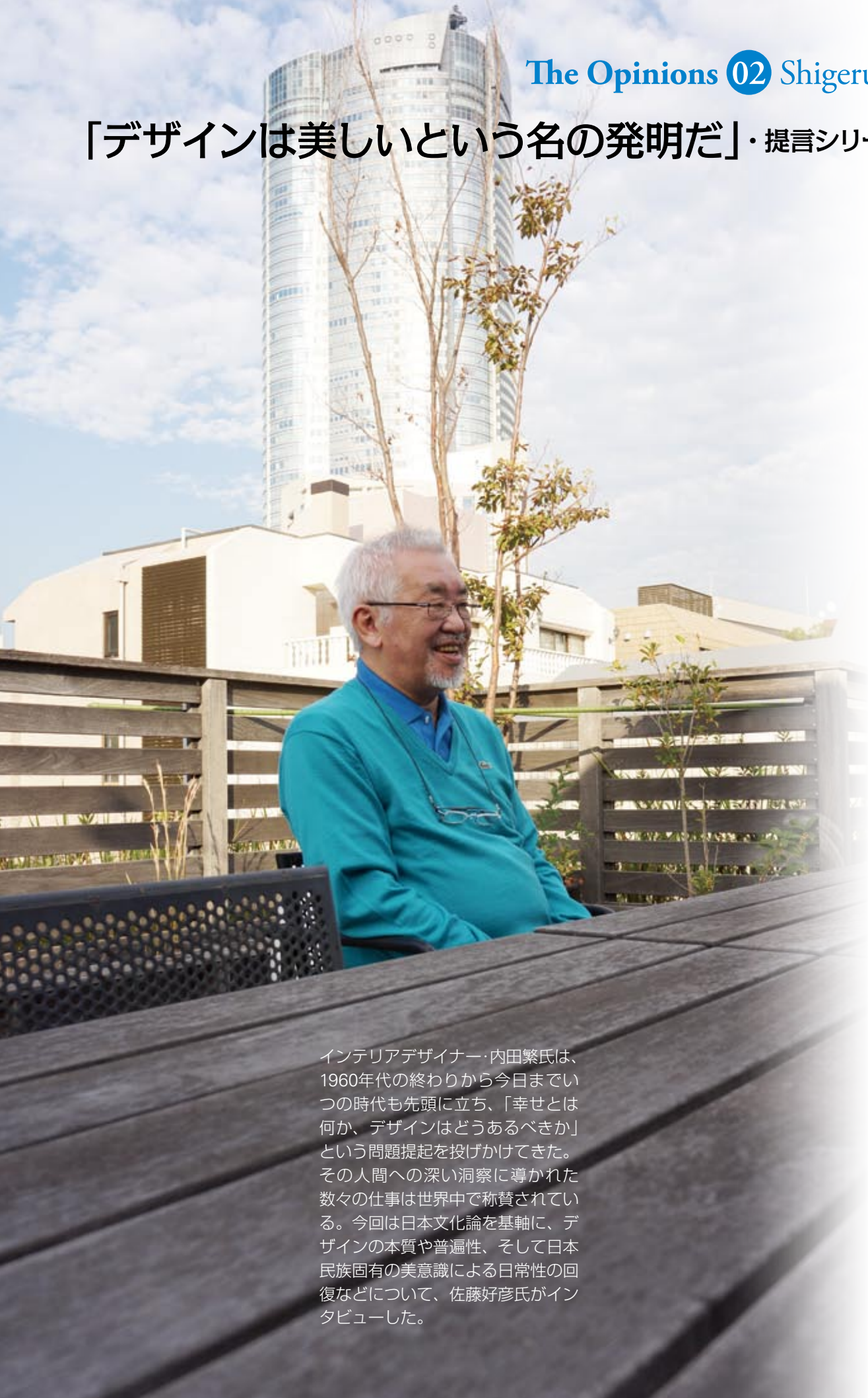
The Opinions 02 Shigeru Uchida

「デザインは美しいという名の発明だ」・提言シリーズ第2回

日本の風土・文化・デザイン

――日々の暮らしと幸せのために――



インテリアデザイナー·内田繁氏は、1960年代の終わりから今日までいつの時代も先頭に立ち、「幸せとは何か、デザインはどうあるべきか」という問題提起を投げかけてきた。その人間への深い洞察に導かれた数々の仕事は世界中で称賛されている。今回は日本文化論を基軸に、デザインの本質や普遍性、そして日本民族固有の美意識による日常性の回復などについて、佐藤好彦氏がインタビューした。

デザインは、人間の幸せのためにある
——若いデザイナーたちに伝えたいこと

——本シリーズ第２回は、文化論的な視点から内田繁先生に「デザイン」について教えていただきたいと考えています。

内田：私は桑沢デザイン研究所を経て、1970年に独立し、住宅やオフィス、商業空間等のさまざまなデザイン活動を行ってきましたが、1968年の社会的パラダイム・シフトは、デザインを語るうえで欠かせないでしょう。

それ以前は、科学的・工業的認識が社会を形成し、人間は機械の部品のようにその仕組みの中にはめ込まれていました。68年以降、それが情報化社会へと急速に移行していきました。私はインテリアデザイナーとして、個人のための社会をつくるべきだと考え、今日まで実践してきました。

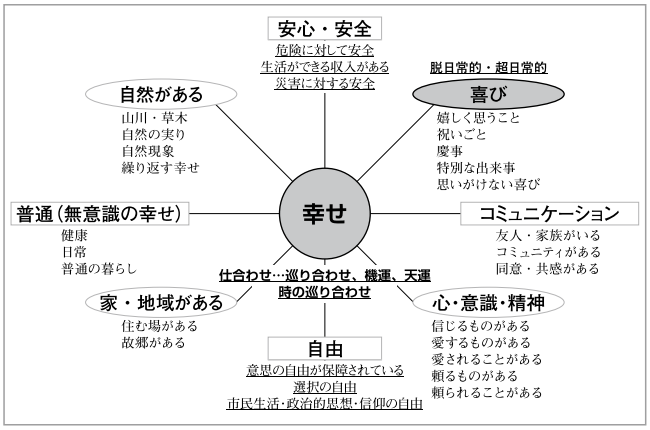
デザインとは、人間と社会を結び付ける役割を担い、社会を形成する重要な立場にあるのです。そして、勘違いされている方もいらっしゃいますが、色や形を美しく整えることだけがデザイナーの仕事ではありません。人間の暮らし全般を考えるのがデザイナーの領域だと考えています。

人間、社会、自然の３要素を包括しながら人間の暮らしを豊かにし、幸せをつくり出していくのがデザインなのです。

——しかし、国や地域、民族によっても価値観が異なりますから、「幸せ」といっても一概にはいえないと思います。

内田：もちろん、日本と外国の価値観は大きく異なり、それぞれに真実があって、幸せの感じ方もさまざまです。

幸せのかたち



しかし、その違いを感じることは、心がときめくきっかけにもなり、多様性を理解し、受け入れることが重要なのです。

私は現在、STRAMDの講師も務めていますが、「デザインが人間の幸せのためにあるなら、幸せとは何か？」ということで、学生たちと幸せの構造を明らかにしてみました。

——若いデザイナーにどのような指導をされていますか？

内田：日本古来の教育思想である「守破離（しゅはり）」。これを実践しています。守破離は、いわゆる徒弟制度、職人の職業教育ですが、デザインの世界にもよく当てはまるのです。

「守」：お手本を守り、完全にマスターする。「破」：手本に基づき自分なりの創意工夫をして確固たる技法やスキルを身につける。「離」：それをさらに究める。

とにかく、学生はひたすら学ぶこと。「学ぶ」という言葉の語源は「真似ぶ」です。まずは徹底的に真似ることで本質

内田 繁 略歴

インテリアデザイナー
株式会社内田デザイン研究所 代表

日本を代表するデザイナーとして国際的評価を受けるなか、世界各国での講演、国際コンペティションの審査、ミラノ、ニューヨーク、ソウル等での展覧会、世界のデザイナーが参加するデザイン企画のディレクション等、常にその活動が新しい時代の潮流を刺激し続けている。メトロポリタン美術館（NY）、モントリオール美術館等に永久コレクション多数。

代表作：山本耀司のブティック、神戸ファッション美術館、ル・ベイン、チャンフン・アート・パーク、茶室「受庵・想庵・行庵」、コトブキのパブリックファニチャー、六本木ヒルズのストリート・ファニチャー、ホテル イル・パラッツォ、門司港ホテル、京都ホテル・ロビー、オリエンタルホテル広島、ザ・ゲートホテル雷門 ほか

主な受賞歴：1987年：毎日デザイン賞、1990年BEST STORE OF THE YEAR特別賞／商環境デザイン賞'90大賞、1993年：第１回桑沢賞、1998年：日本文化デザイン会議会員賞、2000年：平成11年度芸術選奨文部大臣賞、2007年：平成19年度春の紫綬褒章

代表著書：『住まいのインテリア』（新潮社）、『椅子の時代』（光文社）、『都市を触発する建築 ホテル イル・パラッツォ』（六耀社）、『日本のインテリア全４巻』（六耀社）、『プライバシーの境界線』（住まいの図書館出版局）、『インテリアと日本人』（晶文社）、『家具の本』（晶文社）、『茶室とインテリア』（工作舎）、『普通のデザイン』（工作舎）、『デザインスケープ』（工作舎）、『戦後日本デザイン史』（みすず書房）ほか

住宅「古川邸」（1991年）　撮影：Nacasa & Partners Inc.

レストラン「SOLANA」（2008年）　撮影：淺川敏

を理解すべきだと考えています。日本の大学では、真似ぶことをさせないままオリジナリティを求め、一方の学生も真っ当なデザインを知らずに独創性のみを追究しようとしますが、真の独創性は、そんなに簡単に表れるものではありません。

「守」をおろそかにしていれば、それを破ることも、離れることもできないのです。

「破格」という言葉がありますね。「アイツは破格な奴だ、破格な人間だ」。しかしこれも、「格を破る」には、格が何であるかということを知らなければなりません。

もう一つ大切なのが、日常、脱日常、超日常という３つの時間態様の概念です。日常的時間は「生きる」。脱日常的時間は「遊ぶ」。超日常的時間は「祈る」です。

――もう少し詳しく解説してください。

内田：例えば、「住宅とレストランは違う」ということです。シャレた住宅にしたいと思ったら、まるでレストランのようになってしまった……。これでは普通の暮らしができませんから施主もいい迷惑です。

つまり、それぞれが求める幸せを実現するには、デザインにもそれぞれの役割があるということです。そこを理解したうえでデザインすることが重要なのです。

日常的時間に対応するには、日常の暮らしを吟味し、普通の暮らしを考えたうえでデザインしていく……。それは決して、特別なデザインをすることではありません。

――デザインに何か特別なことを期待する人も多いですね。

内田：守破離と同様、本来、デザインは日常が重要なのです。なぜなら、人の暮らしの８割は日常的時間、残りの２割が脱日常や超日常的時間だからです。しかし多くの学生は、日常も知らずに脱日常や超日常的なデザインに夢中になります。そのほうが世間の注目が集まると考えているからでしょう。

脱日常・超日常的な華やかなデザインは、日常のデザインができていなければ、決して良いモノにはなりません。

人が日常の暮らしから離れたいとしたら、そこではまた異なるデザインが必要になってきます。つまり、デザインは心身のあらゆる側面に寄り添う仕事なのです。

「美」は日常に宿り、日常の「美」は常に無理のない「美」でなければなりません。日常の、普通のデザインを究めることこそが、デザイナーにとって最も重要で難しいのです。

佐藤 好彦〔インタビュアー〕略歴

株式会社クイントセンス 代表取締役社長
テクノロジーブランディング研究会代表

1990年、CIコンサルティングのPAOS[現：㈱中西元男事務所]に戦略プランナーとして参画し、NTT ドコモ、ぴあ、神奈川県、栄光、京急百貨店他のCI、ブランド戦略および多くの研究型プロジェクトに従事。

1995年、クイントセンスを設立。アスプローバ、ソニー損害保険、ヤマハ半導体事業部、オンワード樫山、東レ、日清製粉グループ本社、金沢工業大学、三井住友建設他のCI、各種ブランド提案およびコンサルティングを手掛ける。

2008年より研究会を主宰し、「テクノロジーブランディング」という考えを発表。2010年には『技術を魅せる化するテクノロジーブランディング』（技術評論社刊）を監修。モノづくり企業におけるCI再興を意図し、理念の提唱や講演・執筆、コンサルティング活動を展開している。

弱さのデザイン
——人間の前文化的な記憶をデザインする

——内田先生が掲げるテーマの一つ、「弱さのデザイン」について、分かりやすく解説していただけませんか？

内田：「弱さ」とは、合理的でないもの、目に見えないもの、手に触れられないもの、曖昧なもの、不定形なもの、近代合理主義の枠から外れるものなどを指しています。

しかし、もともと人間とはそれほど強い存在ではありません。むしろ移ろいやすく、気まぐれで、傷つきやすくて脆いものなのです。

ところが、20世紀における近代合理主義は、「弱さ」を克服することに主眼を置いてきました。デザインを取り巻く生活・文化も経済優先主義に取り込まれ、企業の利益を優先することが社会常識とされてきました。

言い換えれば、人間の生活や本質がないがしろにされて、我々は窮屈で自由度のない状況に置かれていたのです。

——チャップリンの「モダン・タイムス」の世界ですね。

内田：まさに歯車です。「弱さ」を人生の無意味さや弱点の根源とみるか、逆に幸福の根底と捉えるかによって、「弱さ」の議論は分かれますが、見えない何かを想い、静かにたたずむといった描写は、人間の気持ちの中にやさしさと静けさ、危うさと切なさをつくり出します。これは、「強さ」との対比ではなく、「弱さ」が独自に持っている特性なのです。

展覧会「SENSE OF WEAKNESS IN DESIGN」(2007・Milan)　撮影：小竹四朗

「弱さ」からは、やさしさと憂い、寂しさと侘しさ、はかなさと移ろいやすさなど、慈しむ心が顕在します。人間とは、こうしたものを「美しい」と感じるものなのです。

「ワビ」という言葉は、侘しい、寂しい、悲しい、憂いている状況のことなどを指しますが、決してネガティブに捉えられることはありません。むしろ、そういう心を持っている人間こそ美しいという認識が我々のなかに存在します。

——桜が咲いたといっては喜び、散れば散ったでまた感動する……。はかなさ、弱さ、ワビとは、これほどまでに桜を愛でる日本人特有の感性なのでしょうか？

内田：もちろん、国や地域、民族などによる固有性はありますが、例えば、私は夕日をデザインできないだろうかと考えているのです。おそらく、夕日に対する心の感動は世界共通だと思うからです。これは、古代からの記憶というか、観る人それぞれが故郷を想い出すような、共通項的で前文化的な記憶。そういったものが必ず存在すると考えています。

——それを具現化したのが「弱さのデザイン」ですね。

内田：そのとおりです。2006年に南アフリカのケープタウンで「Design INDABA」という国際デザイン会議があり、私はそこのゲストスピーカーとして招かれました。世界中のデザイナーが6000人くらい集まる国際会議です。

その時、「弱さのデザイン」というテーマで講演し、その最後に、「ダンシング・ウォーター」の映像を流したんです。

「Dancing Water」(2007・Milan)　撮影：内田デザイン研究所

当初は「おそらく聴衆は理解できないだろうな」と思っていたのですが、講演を終えると同時に聴衆から取り囲まれ、そのなかの一人が、「私は牧師なんですが、先ほどの映像を信者に見せたいのでいただけませんか？」と言うので、その場で差し上げました。

――ダンシング・ウォーター……。水の揺らめきが光で壁面に投影され、実に美しい世界を創り出す作品です。

内田：「見えない何かを想い、静かに佇む。気持ちのなかに、やさしさと静けさが満ちてくる」というメッセージを作品に込めています。あの時の聴衆の興奮ぶりは何だったのかと考えるのですが、おそらく、この作品で彼らの前文化的な記憶を刺激することができたのではないでしょうか。

また、ニューヨークで「Shigeru Uchida Exhibition 2009」という展覧会を開催したのですが、その時に掲げたテーマは「ぼやけたもの　霞んだもの　透けたもの　揺らいだもの（vague hazy transparent wavering）」です。

――これも「弱さのデザイン」ですね。

内田：そうです。米国でも高く評価されたことで、「弱さのデザイン」は国境や民族を超えると確信しました。

やはり人間とは、こういったもののほうが美しい、安心できると感じる心をもともと備えているのです。

――人類という種への進化過程でDNAのように受け継がれてきた記憶なのですね。

「Shigeru Uchida Exhibition 2009」（New York）　撮影：淺川敏

日本人だからこその優れた感性や自然観
――無常観を無常美観へと転換させる

――内田先生の作品に「茶室シリーズ」があります。私はこれを見て、日本文化の仮設性や柔軟性に気づきました。

内田：日本人は流動することを容認する自在性があります。変化することが普通、それを当然だと認識しているのです。

茶の湯の世界というのは、春は桜の下で、秋は楓の下でというふうに簡単にゴザを動かして……。

――それです！　敷物を１枚敷くことによって……。

内田：あの敷物は何かというと、日本人はあれを「家」に見立てているんです。家が移動してしまうのを自然に受け入れることができるのは、日本人くらいではないでしょうか。

――なるほど。家といえば、日本は多湿なこともあり、調湿効果の高い木や紙が多く使われています。そこにも柔軟性があると思います。例えば、障子１枚で隔てた空間。隣の気配や音は聞こえても、それを聴かなかったことにする……。

内田：そうですね。日本人は、人間、社会、自然の３つの観察を繰り返して文化を育んできました。ですから、他の民族と比べると日本人の自然観は非常に独特です。

自然は常に一定ではないという認識が根底にあって、そこから無常観が生まれます。そして、無常観を無常美観に転換する能力を持っているのです。これは日本人特有の感性だといえるでしょう。

茶室「受庵」　撮影：淺川敏

——優れた感性ゆえに、日本人は、特にかすかな違いに気づくことができる民族だと思います。

内田：そのとおりです。以前、フィリピンで開催されたシンポジウムの講演依頼がありました。当日、米国のジャーナリストが私より先に演台に立ち、こう主張したんです。

「米国人の感覚は非常に微細である。なぜなら、米国では白の色には微妙な違いがあって、10色くらい存在する」と誇らしげなんです。私は「シメた！」と思いました。

私に講演の順番が回ってきて、開口一番、「日本には黒が100色くらいある」と切り出したところ、ウケました（笑）。

——それは痛快ですね（笑）。

内田：色の違いに限りません。例えば、外国人が日本に来て日本料理を食べると、味の差が分からないという方が多いそうです。日本人は味覚の面でも繊細だといえるでしょう。

季節によって旬の物を楽しむ文化がありますから……。

——確かに、味付けも最小限で、素材のうまみを引き出すことに主眼が置かれています。ですから、なおさら外国人には味の違いが分からないのでしょう。

内田：ただ、最近は日本人も近代合理主義によって、物質的な豊かさを求めすぎ、それと引き換えに、日本人固有の感性を失いかけているかもしれません。

——確かに。一昨年ですが、私がある大学で講義をしたとき、「三寒四温（さんかんしおん）」という言葉を知らない学生がいて驚きました。

茶室「桜丘の茶室」　撮影：淺川敏

内田：そういった季節の微妙な移ろいを的確に表す美しい言葉は、日本人としてぜひ知っておくべきですね。

——言葉だけではなく、ファスト・フードをはじめ、食文化も西洋化してしまったことで、日本人として大切にすべきところが抜け落ちている気がします。

内田：そういった風潮は元に戻すことができますかね？

——どうでしょう？　デザインにおいても、現状は「欲望の刺激装置」として機能している部分のほうが、まだまだ大きいのかもしれません。

内田：一般的にはそういった傾向が強いでしょうね。

——我々はそろそろ、物質的な豊かさだけではなく、精神性をもっと究めていくべきだと思います。そこで日本人の感性が活きてくると思いますし、デザインの持つポテンシャルが発揮されてくるのではないでしょうか。

内田：そこは我々も反省すべき点があります。もっと言葉に出して、多くの人々に伝えていくべきだと思います。

——「日本はもっと貧乏国家になり、それでも豊かさを感じられるレベルになったうえで、問題解決手法としてのデザイン活動をBOP（Bottom of the Pyramid）の方々に向けるべきだ」と川崎和男先生もおっしゃっています。

内田：その実現は困難かもしれませんが、単なる経済的な回復にとどまらない方向性が必ずあるでしょうね。また、我々はそれを見いだしていかなければならないと思います。

ホテル「The Gate Hotel雷門」（2012）　撮影：淺川敏

デザインに日常、脱日常、超日常があるように、テクノロジーや発明にも同様の考え方が必要です。

――3.11の東日本大震災も「安全設計や社会システムとしてのデザインが機能しなかった」といえるかもしれません。

内田：いわゆる安全神話ですよね。少なくとも絶対的な安全はないと考えておかなければいけません。

3.11といえば、先日、桑沢デザイン研究所にオノ・ヨーコさんが講演にいらっしゃいました。そこで彼女は、「誤解をおそれずにいえば、あの震災は日本で起きてよかった」とおっしゃっていました。

その真意は、他の国で起きていたらパニックになっていただろうということです。日本人だからこそ、必ず震災を乗り越えることができると。

――確かに、和辻哲郎氏の『風土―人間学的考察』という名著にあるように、これまでに培われてきた日本人の精神性がそれを可能にするのでしょうね。

内田：日本は土地柄、延々と自然災害に見舞われてきたこともあり、日本人は精神的な強さや豊かさを備えていると思います。自然を恨むこともなく、前に向かって再出発できるという強さがあるのです。

第二次世界大戦の敗戦後の復興をみても、ネガティブなものをポジティブに変えていく、つまり、無常観を無常美観に転換する能力を我々は持っているのだと感じます。

デザインも発明も、人間の幸せのためにある
――日常の暮らしのなかから発明を発見する

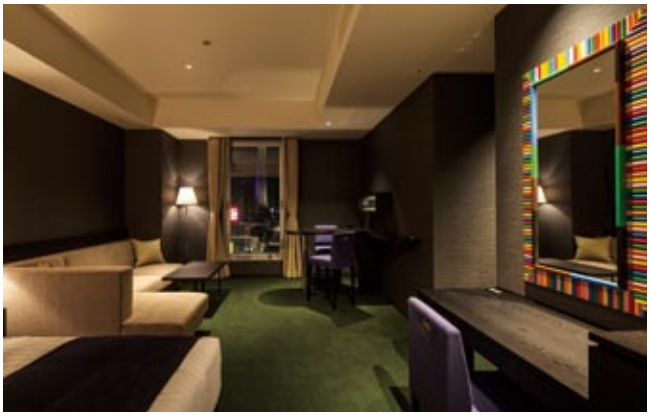
――デザインの本質について内田先生にお伺いしてきましたが、今回の内容は本誌読者にとっても、非常に示唆に富む内容だったのではないかと思います。

それでは、最後に読者へのメッセージをお願いします。

内田：デザインが人間の幸せのためにあるように、発明もまた然りだと思います。そして、発明の原動力となるものは、あらゆる物事をさまざまな角度から観察することによって生じる「発見」ではないでしょうか。

デザインや発明に限らず、何事においても専門性を追究すればするほど視野狭窄へと陥ってしまいがちですが、モノの見方や捉え方において新たな視点や「気づき」がなければ、イノベーションを創造することはできないでしょう。

ただし、デザインも発明も人間の幸せのためにあるという本質を見失わないよう、自分自身に常に問い掛けることが重要です。それには、基本を疎かにしてはいけません。まずは我々の身の回りや普通の暮らしを前提に置いて思考を深めていく必要があるのだと思います。

（「発明」編集部）

ホテル「The Gate Hotel雷門」（2012）　撮影：淺川敏